

「一」からはじまったぼくの命

京都府 京都市立錦林小学校二年 村田 響

せのびしても口まで水がくる水しん一、ニメートルのプール。ぼくはこの夏とても上手にもぐれるようになったからと、自しんまんまんでお母さんより先にドボンッとびこんだ。えっ!? コンクリートがない。はながじんとして、どんどんしずんでいく。足を動かしてもやっぱりゆかがない。こわい。くるしい。しぬ。ぼくはひっしにお母さんをさがしてしがみついた。その後何どもしぬ顔がうかんできて、かきけしたくて頭をよこにふった。もうプールからはなれたくて、お母さんに、「帰ろう。」

とないた。体をふいていると、お母さんのおなかに大きな横一本線が見えた。前から気になっていたけれど、聞いてもいいのかだめなのか、やっぱり気になり聞いてみた。お母さんはうんと細かい目になって、おなかに

をなでなでしながら話しはじめた。いつもよりやさしい声。

「これはあなたと出会うためにつくった線なの。あなたはこのからうまれてきたのよ。」

ぼくはよてい日をすぎてもうまれてこなかった。おくすりをつかってもまだ三日間おながいたくたくるしくて、それでおなかに「一」をつくったそうだ。ぼくはおなかを切るなんて、しぬのと同じくらいおそろしいことだと思った。けどお母さんは、ぼくがとてもおそろしいと思うこの日のことを、それまでの人生で一番しあわせな日だったと言った。なぜ? ぼくに会いたかったから? ぼくがかわいいから? え顔がふえるから? いっぱい聞いていたら、お母さんの「一」がとてもいさましく、カッコよく、きれいに見えてきた。うまれるってすごい! 地きゅうに人間が一人ふえるってすごい! さっきまでしぬ

ことにしはいされていたのに、ぼくのむねはやわらかくほかほかしてきたんだ。

ぼくは楽しいことがあるとついむ中になりすぎ、「気をつけなさい」とちゅういされることが多い。でもどうしてそう言われるのかわかった気がする。すぐく楽しくて大すきなプールでも、ほんの少しのことでも命をうしなうことがあるからだ。どんなに楽しい時にもきけんがすぐ近くにあることを、きちんと頭の中においておかなければいけない。すぐ楽しくなってしまうけど、そのことはせつたにわすれてはいけない。お母さんが、しぬのと同じくらいおそろしいことをしてぼくをうんでくれたんだから。うまれたばかりのぼくを、お父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんもうばい合っただっことしたらしい。大人がぼくをしかるのは、ぼくがうまれてきたことをとてもよろこんでくれているからなんだ。やくそくをまもる。大人の言うことをちゃんときく。これがぼくにもできる命を大切にすることなんだ。

ぼくはこれから、一りん車やキャンプなんかにもちようせんしたいと思っている。びっくりするほど生としが近くにあること、お母さんの「一」からぼ

くの命がはじまったこと、大切に思ってくれる人がいるということ、どんな時もぼくはわすれない。お母さんの「一」からもらった命を、ぜつたいに大切にするんだ。

お母さん、ぼくをうんでくれてありがとう。

